

こいしわらがわ

小石原川

東峰村 ← 朝倉市 ← 大刀洗町

古処山系・馬見山や白石山および英彦山系・大日ケ岳、台山などの山々に囲まれた小石原地区を西流するのが小石原川です。延長約28kmの小石原川は、福岡都市圏の最大の水がめである江川ダムを有し、秋月、甘木を流れ、そして筑後川に合流していきます。

小石原川の流れる周辺は、1682年に黒田の殿様が伊万里より陶工を招き、焼き物を作らせたことから始まったとされる「小石原焼」、鎌倉時代の「秋月城」、そして邪馬台国甘木・朝倉説の中心となる「平塚川添遺跡」などがあり、古代から人々の生活に大きく関わって来た、ロマン漂う情緒豊かな川なのです。



江川ダム



秋月(黒門)



平塚川添古墳



動植物の生育に適した小石原川

福岡県には漁業権が免許されている河川が10河川あります。漁業者はこれらの河川を漁場として利用し、アユ、ハヤなどの水産資源を食材として県民の食卓に供給しています。小石原川はそういった河川のひとつであり、小石原川に生息する魚の種類数は、この10年間はほぼ変わらず、ヤマメ、アユ、ハヤなどの生育に適した水質を保ち、魚の餌となる水生昆虫も筑後川などの大河川に劣らず豊富なのです。

また魚類に限らず小石原川ではヤマセミ、カワセミ、セグロセキレイ、マガモ、カルガモなどの鳥類やトノサマガエル、カジカガエル、ゲンジボタルの幼虫といった小動物、水辺にはツルヨシなどの植物が繁殖し、実に多くの生物が生息しています。

● 印のURLをクリックすると関連サイトのホームページが開きます。

小石原焼

小石原焼(こいしわらやき)は福岡県朝倉郡東峰村にて焼かれる陶器です。

起源は諸説あります。その中でも有力な説が、1682年に黒田光之公が肥前伊万里から招いた陶工が窯場を開き中野焼を伝え、この中野焼とこの頃すでに小石原にあった高取焼とが交流することで小石原焼ができたといわれています。

昭和初期までは、かめや壺、すり鉢、徳利といった生活雑器が焼かれていましたが、昭和30年代からの陶芸のブームと日本の陶芸界に大きく影響を与えたバーナード・リーチや柳宗悦らに賞賛され全国に紹介されたことで、生活の器へと転換していきました。また、昭和33年にはブリュッセルの世界博覧会でグランプリを受賞。小石原焼の刷毛目、飛び鉋、櫛描など表現される独特の幾何学的な紋様は、日本だけでなく世界的にも評価され親しまれるようになりました。

東峰村では2006年「河川をきれいにする条例」を制定しています。

2015年の小石原川ダムの完成を目指して工事が進むことから、水環境を守っていく姿勢を内外にアピールしました。ホタルや湧水、そして伝統工芸の小石原焼にとっても水は大切な役割を果たしており、村と村民全体が河川の浄化を図ることにより水と緑の豊かな村作りを目的としています。



江川ダムは福岡県朝倉市、一級河川・筑後川水系小石原川に建設されました。福岡都市圏への利水と両筑平野用水の水源として建設された高さ79.2メートルの重力式コンクリートの多目的ダムです。また、ダムによって形成された人造湖は上秋月湖(かみあきづきこ)と命名され、2005年には財団法人ダム水源地環境整備センターが選定するダム湖百選に選ばれています。

江川ダムは福岡市、北部九州の水がめとして重要な役割を担っていますが、1978年(昭和53年)の福岡大洪水で江川ダムが枯渇。これを受けて更なる水源整備が計画され、江川ダム上流の上秋月町に小石原川ダムが現在計画されています。

江川ダムは、両筑平野用水事業の基幹水源施設。両筑平野に農業用水を供給するほか、福岡地域の水道用水などを供給しています。

流域面積/30Km2
湛水面積/86ha
総貯水容量/25326千m3
有効貯水容量/24054千m3

江川ダム

photo



photo

photo

photo



秋月城跡

鎌倉時代のはじめ(1203年)に原田(秋月)種雄が幕府より秋月庄を賜り秋月城(現在は城跡のみ)の築城を始めてから戦国末の秋月種実・種長父子まで、実に17代、約400年もの間この地は秋月氏の本拠地でした。しかし天正15年(1587年)、九州に攻め込んだ豊臣秀吉の軍勢の前に敗れ、秋月氏は日向国高鍋に移封され、その後江戸時代に入り(1624年)、黒田長政の三男長興が秋月藩5万石を分知されて、現在の町割りが行われました。秋月の眼鏡橋、500mの直線両側に桜の木が並ぶ杉の馬場の桜など、今もその美しい町並みと自然景観から、秋月は筑前の小京都として親しまれています。

小石原川の上流、野鳥川に沿う城下町秋月、13世紀以来の文化が山里に散在しています。

ちなみに秋月城下町の入り口に架かる目鏡橋は、1810年に野鳥川に架けられました。

大きな洪水にも壊れない丈夫な橋を架けるために、長崎から技術者を招き、その指図によってオランダ風の橋を架けることができました。

平塚川添遺跡

弥生時代中期から古墳時代の初頭にかけて営まれた「邪馬台国」時代の大規模な低地性の多重環濠集落遺跡として、防御施設や物見台、祭殿、首長館、堀穴住居など歴史的価値の高い発見がされ、平成13年に遺跡公園として復元されました。

吉野ヶ里に続いてこの平塚川添遺跡の発見は、「邪馬台国」甘木・朝倉説論者達には絶大なる援護射撃となっています。もちろんこうした古代史ファンに限らず、平塚川添遺跡は壮大なロマンを現代の人々に語りかけてくれます。

平塚川添遺跡の特徴は、その幾重にも張り巡らされた環濠の規模の大きさにあります。現在までに六重の環濠が確認されており、大部分が弥生時代後期に築造されたものです。環濠の断面はU字形で、濠と濠の間隔は、1~4重目までは3~5m、4重目と5重目は約8mと広がっています。6重目の濠は最も規模が大きく、幅約23m、深さ2mにもなります。この環濠の役割は、まさしく魏志倭人伝にいうところの「倭国大乱」に備えたものと考えられ、当然ながら濠には、小石原川を含め周辺の河川から引いた水が注がれていたと思われます。



photo